

えて設計することと昼から夜という時間変化を利用した設計、時間のスパンの長さが大きく違う2つだが、そのどちらも時間設計と呼べるのだろうか。反対の意味に空間設計というものがあって、こちらは目に見える設計であり、時間設計の方は目に見えないということで簡単にはできない。子供の成長を例にとると、子供は育っていくものだから、環境つまり空間設計が大事である。同時にこどもの成長を予想して時間設計にも気を配るのは大事なことで、空間設計と時間設計はペアで考えるべきだと思った。



- 今回の講義で衝撃を受けたのはこの世界は時間と空間で出来ている、という事実だった。アインシュタインの相対性理論は聞いたことがあったが、それがなんなのかまったく理解も出来ずにいる現在、この講義によってその片鱗が見えた気がしたのだ。安藤先生が仰ったこと、最初は当たり前のことを言っているだけだなこの人、と考えていた。しかしその考えは、大きな間違いだったのだ。先生が強調されたこと「個性」。これが重視されるのは昨今では普通のことだと講義していたが、私はその本当の意味を理解していなかった。「個性」だけあるのと、「個性」と「科学」、「芸術」など？と調和するものは、まったく別のものがあったのだ。それらが調和する中でもっとも大掛かりなものは建築である。建築は時間と空間、両方を設計するもの。共に生きる建築を作ることが建築業界の目標とも言えるだろう。最後に、作業台をコの字型にして、右左脳に分けてしまうその書斎作りには衝撃をうけた。今度部屋の模様替えするときは試してみたい。
- 以前まででは、建築音響のみならず、建築についてのものは、そのもの（建築音響では音響）の特性についてのみを考慮すれば良いと思っていたが、今回の講演を受け、建築ということについて改めて考えることができた。建築はあくまでその中に存在する人間にとって快適でなければいけないということを強く感じた。そのためには、人間そのものの習性や機能について知る必要があるということである。人間のことでだけでなく環境やその条件を考える必要があるだろう。そして、その環境・条件は「現在」のみにとどまらず、10年後、20年後というスケールでの検討が要求される。特別講演において“知が知を生む”ということを知った。それをもとに自分の実家のある町について考えてみた。私の住む町は知を生み出すような施設は何もない。しかし、幸運にも市街地にはある程度近いので、ただ都会に憧れ、家を出たいとは思っていたが、文化に乏しいということを感じることがなかったように思える。そのように考える機会となり、今後建築に関わっていく上で非常に貴重な経験をしたと思う。

構造システムの可能性

(株) オーク構造設計 新谷眞人
環境システム工学科 (建築系) 3年対象 担当教員：田中智之

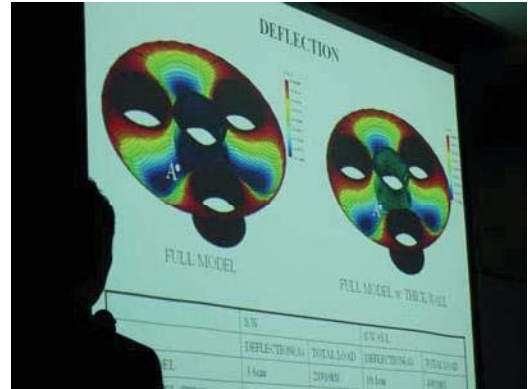
実施概要

建築構造設計の第一線で活躍されている新谷氏により、平成18年1月12日、工学部研究棟II・1階電教講義室において「構造システムの可能性」と題する講演が開催された。聴講者は約100名。氏は現在国内外にて優れた建築を生み出している著名建築家（伊東豊雄、谷口吉生、原広司、隈研吾など）と協働する構造設計者である。構造設計者といっても設計を下請けのように受注する、いわゆる構造計算屋とは一線を画す存在であり、建築デザインと構造の融合を標榜する数少ない「構造デザイナー」のひとりといえる。

講義は「構造設計とは何か」「素材と技術」「新しい構造の可能性」などのテーマを軸に、国際的に注目されている建築



作品「TODS 表参道」「ゲントフォーラム」などの具体的事例を紹介するかたちで行われた。これらの建築は、伝統的な建築材料であるコンクリート、鉄、ガラス等を用いたものであるが、全く新しいフォルム（かたち）をもち、なおかつ構造的合理性を併せ持つ稀有な例として注目されている。建築家が抱く、一見不合理にもみえるイメージに合理的な構造システムを与え現実していくことについて氏はこう説く。「合理、非合理はその時代背景により変化する。現在合理的と判断されているものは近代の古い社会背景・思想に基づいており限界がある。われわれは新しい合理性を考え実現せねばならない」と。建築と聞くと教科書通りのラーメン構造しか発想になかった学生たちにとって極めて示唆的であり、印象的な講義であった。



学生の感想

- 聞いてみると、構造に関する難しい言葉や自分の知らない用語が出てきました。それは、私が4年生であるということ以前に、自分の知識のなさに気づきました。4番印象に残っているのが、伊東豊雄氏のWRG表参道ビルでした。全員見たことがあるという前提で話しは進められましたが、正直私はまったく知りませんでした。こんな構造が可能なのかと衝撃を受けました。構造デザイナーは大きく5つに分けられて、荒屋氏は建築家とコラボレーションを主としているという話がありました。それは、自分でデザインするよりも、こっちのほうが向いていると話していました。その言葉は印象的でした。私は、ただ建築家を目指していましたが、自分に何が向いているのかを見つけることが非常に大切であると感じ、意識が変わりました。また、構造設計者の資質という話の中で「対話力」というものがありました。これは、構造設計だけでなく、建設全般に通じるものだと思います。今回の講演会では、構造のことだけでなく、さまざまなことを学びました。「対話力」というものを養い、多くの作品を見て、経験を積み、自分が何かを創造するときの引き出しを作って生きたいとおもいました。
- 今まで、複雑そうに見えるものについて、真剣に構造的なことについて考えたことがなかった。しかし、今回の講義を聞いたことで、アイデアの幅がすごく広がったように思います。いろいろな例を見ながら、お話を聞くことが出来て、どんな建築物でも、一見構造的に無理そうに見えても工夫次第で対策がみつけれ、ある程度可能になるのではないかと感じた。私も大学はいる前にデザインしかないと考えていたが入ってみるとほかにもいろんな分野があり、自分に向いているものがほかにあるんじゃないかと思えるようになったから、何事も決め付けるのは良くないなと思った。構造的なことが今いろいろと問題になっているけれど、そのことで、複雑でもきちんとしている建物があるのに、建物全体が疑われるようになってしまうのはすごく残念だと思う。
- WRGのお話では、精度の大切さを知った。液状のコンクリートを決められた寸法に整えなければ決して別製造のガラスははまらない。それに費やす労力が何千枚もの図面として表されるのだろう。課題で作る模型ですら、なかなかシャープなエッジを出すのは難しい。細部にまで神経を鋭らせる集中力と体力を身に付けるべきだと思った。また、ゲント市文化フォーラムでは実にユニークな発想から生まれた形態で非常に複雑でありながら、その形態の中に隠れている構造システムを見つけ出すということだった。しかし私には到底難しくて手を付けられない。構造のスペシャリストとは本当に考察力に優れているのだと思った。

